

りんご「春明21」の 貯蔵後に発生する やけ病の低減策

りんご「春明21」は11月中旬収穫の晩生種で、長期貯蔵した後の4～6月に販売される“後期販売向け品種”です。しかし、貯蔵後に果皮が褐変するやけ病が発生し、外観を損なう果実が多くなることがあります。これまでの調査で、着色の不良な果実でやけ病の発生が多い傾向がみられました。そこで、反射資材を利用して樹冠*の光環境を改善したところ、果実の着色が向上し、貯蔵後のやけ病の発生が低減できることが明らかになったので、紹介します。

*樹冠：樹木の枝や葉が茂っている部分

果実の着色向上



反射資材を利用し、
樹冠の光環境を改善



9月下旬～収穫期まで 反射資材を設置

全面着色した果実の割合が増加

着色面積
100%の
果実



果実側面
(赤道部)

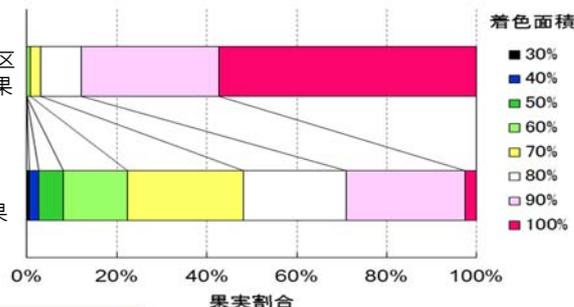


果実底面
(がくあ部)

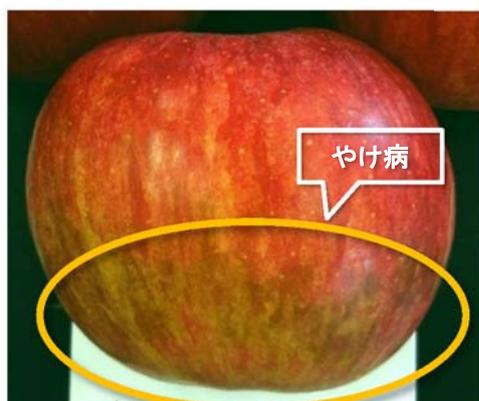
供試樹：普通台樹

反射資材区
調査:459果

無処理区
調査:197果



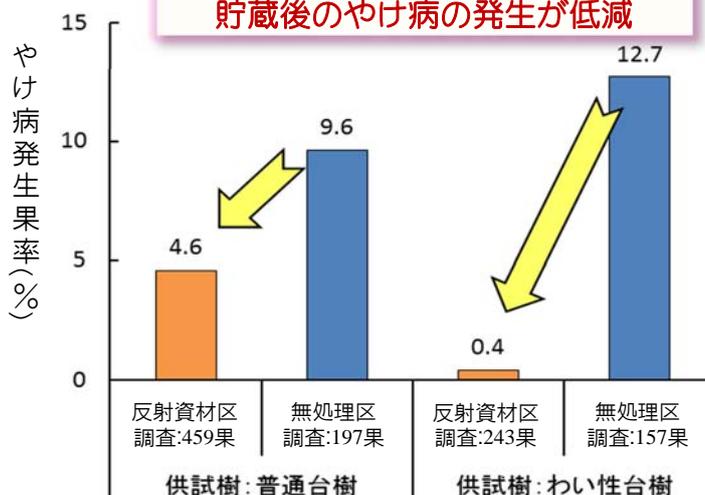
貯蔵後のやけ病の 発生が低減



やけ病

着色不良の場合：やけ病の発生多い

果実の着色が向上することで 貯蔵後のやけ病の発生が低減



お問い合わせ

りんご研究所 栽培部 (Tel.0172-52-2331)